

鍬形蕙齋が描いた傑作として名高い『江戸一目図』屏風は、もとは襖であったといわれています。これは、津山城の襖であったという伝承と、作品に残る取っ手の痕跡がその理由とされ、ほぼ確定したものと語られてきました。しかし現在では、重要な証拠である取っ手の跡も見出すことができず、確実な証拠となるものはありません。そこで、これまでとは少し異なった視点でこの問題を考えてみます。

『江戸一目図』は、文化6年（1809）の年号が記されていることから、その年に制作されたものと推定され、そのころ蕙齋は江戸にいましたので、江戸で描かれたこととなります。では、津山城本丸御殿の襖のために制作されたと仮定すると、一体、御殿のどの部屋に使うことを想定していたのでしょうか。

森家以来の御殿は、文化6年の正月に焼失していますので、再建された新御殿のための襖ということになります。また、記録に残っている蕙齋の仕事内容からすると、公式行事などに使われる表向き御殿の襖であったと考えられます。しかし、本丸御殿の再建工事は奥向きから進められており、表向き御殿が姿を現してくるのは文化7年の後半になります。

当時の御殿建築における装飾画は、部屋の名称から絵画の内容が容易に想像できるくらいに、統一された主題が存在していました。建物の具体的な構想がない文化6年の時点で、とりあえず襖のために絵を描いたというのは現実的ではありません。

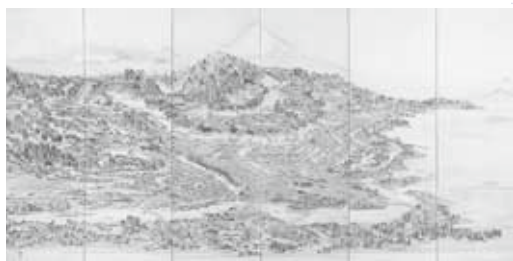
津山城百聞録

～『江戸一目図』屏風は襖だったのか？～

それでも、できあがっていた『江戸一目図』をどこかの襖にはったと仮定した場合、表向き御殿のどの部屋がふさわしいのでしょうか。表向き御殿は玄関広間から続いて、竹之間・桜之間・藤之間・芥子之間を通じて書院へ入り、松之間・紫陽花之間・鳳凰之間となっております。『江戸一目図』がふさわしい部屋とは思えません。

また、奥向き御殿の可能性を考えたとしても、部屋の境に使われている襖は、2枚組あるいは4枚組になっており『江戸一目図』のような6曲屏風に仕立てると、どこかに継ぎ目が残ることになります。しかし、『江戸一目図』本紙の中には、そのような継ぎ目は見られず、折り筋だけが残されています。

このことから、折り畳まれていた一枚物の絵を屏風に仕立てたと考えるのが、最も理解しやすいこととなります。



▲『江戸一目図』屏風

1月中のひとの動き

人口	110,963人	(前月比+24)
男	52,979人	(同+33)
女	57,984人	(同△9)
世帯	43,464世帯	(同+33)
転入	228人	転出 203人
出生	108人	死亡 109人
(2月1日現在)		

広報つやまは、環境保護のため古紙配合率100%再生紙、大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください



つ・ぶ・や・き 編集室

アルネ・津山は、驚きのリニューアル第2弾！4月にオープンするカルチャープラザには、150もの講座があるの、新しい趣味と出合えるかもしれませんね。4月から、心機一転、私も何かを始めたいと思います。(e)

地ビール、ワイン、焼酎など、お酒のブームはときによって変わりますが、今は日本酒の中でも、純米酒が好まれているとか。お酒は心を和ませ、楽しくさせてくれるもの。週2回の休肝日を守るの難しいです。(元)

特集の取材でお世話になった酒蔵で聞いた「家付き麴」という耳慣れない言葉。酒造りに使う麴菌が数百年もの間に蔵の梁や柱にすみ着いた麴で、酒の味にも影響するのだそう。酒はまさに歴史が造っているのですね。(X)

つやま 広報 3月

平成19年 2007 629号

編集・発行 (毎月10日発行)
津山市企画部市長公室 (市役所3階)
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>